平成 22 年度　首都大学東京　FD セミナー

単位制度の実質化シリーズ No.2　　“学生の自発的学習を促す”

「学生の学習活動の現状とその支援」

夏目　達也（名古屋大学高等教育研究センター教授）

本日はこのような会にお招きいただき、誠にありがとうございます。首都大学東京では、2 年前に大学教育学会を開かせていただき、私も会員として参加させていただきました。そのときに、広いキャンパスで道に迷いながらあちこちの会場を回ってだいぶ苦労した関係で、今日はまだ 2 回目ですが既に何回か来たような錯覚に陥っています。私にとっては非常に親しみの持てるキャンパスでお話をさせていただけるということで、大変光栄なことと感謝しています。

さて、本日私にいただいたテーマは「学生の学習活動の現状とその支援」です。この点に関して、これから 1 時間ほど話をさせていただきます。まずはじめに、講演の目的を 3 点ほど考えてみました。一つは、単位制度の趣旨です。簡単に言えば、単位を取得するためには、授業時間だけでなく授業外学習時間をきちんと取ることが不可欠の構成要素になっているということです。このことは言わずもがなですが、これをあらためて確認しようというのが第 1 点です。

2 番目に、幾つかの調査結果から、以下の点を概観してみたいと思います。一つは、学生の学習行動が非常に多様化してきていて、その中にあって主体的な学習行動が全体に不十分な状態にあるということです。そしてもう一つは、そういった主体的行動が弱いということは、大学に入って初めて起こるわけではない、それは実は高校時代からずっと見られる傾向なのだということです。この 2 点を、幾つかの調査結果に基づいて申し上げたいと思います。

3 番目には、では授業外学習を学生に促すためには一体何が必要なのかということです。その点について、私が所属している名古屋大学の高等教育研究センターの取り組みなども交えてご紹介します。

以上の目的を達成するために、次のような講演の構成を考えています。一つは、高校教育の多様化と生徒の学習行動です。簡単に言えば、高校生の段階から生徒の主体的な学習が全体に弱く感じるというお話です。2 番目には、それでは大学に入ってきて、学生たちは一体どのように大学の学習教育に向き合っているのか、その現状を見るということです。3 番目に、主体的な学習を促す試みということで、初年次教育の取り組み、ピア・サポート、さらには学生向け学習・生活ガイドについてご紹介し、最後に若干のまとめを行いたいと考えています。

1. 高校教育の多様化と生徒の学習行動

1-1. 政策的に進められてきた高校教育の多様化：文科省の政策

最初に、高校教育の多様化の影響を受けて生徒の学習行動も相当多様化している、つまり主体的な学習行動が非常に弱くなっているということですが、そのバックグラウンドを簡単に見ていきたいと思います。

高校教育の多様化は、一つは文科省を中心とする文教施策によるものということができます。文科省は高校教育の多様化をどんどん進めてきました。特に 1990 年代からその傾向は非常に顕著です。一定の年齢以上の先生方からすると、高校の多様化という話はとっくに聞いた、自分の高校時代から実施されていたとお考えになるのではないかと思います。確かに 1960 年代から高校教育の多様化という問題は提起されていて、政府も進めてきました。しかし、その当時の多様化というのは、ほとんど職業学科に関するものでした。多様化する産業界のニーズにどのような形で応えていくか、あるいは生徒の多様化にどのように応えていくかというのがその当時のテーマだったと思います。

これに対して 1990 年代以降の高校教育の多様化というのは、主として普通科あるいはそれに類した学科で起きている問題なのです。大きくとらえると、プログラムによるものと制度改正によるものに分けることができます。

プログラムによるものは、よく先生方もお聞きになっていると思うのですが、スーパー・サイエンス・ハイスクール、スーパー・イングリッシュ・ランゲージ・ハイスクール、サイエンス・パートナーシップ・プログラム等です。とりわけ理数系と英語で、重点的な取り組みを行う学校を積極的に支援していこうという取り組みです。最初のころは、いわゆる各地におけるトップ校クラスを中心に支援していました。

制度改正によるものでは、中等教育学校（公立版中高一貫化）や単位制高校、総合学科、総合選択制高校等の施策がどんどんとられてきました。

それに輪を掛けたのが、学習指導要領の改訂です。

1-2. 入学前の学生の学力の状況：多様化が顕著に

簡単に言えば、昔は普通科と職業学科で分けておけばよかったのですが、最近はほとんどの生徒が普通科に行きます。昔、1960 年代はまだ 40％ぐらいの生徒が普通科以外、主に職業学科に学んでいるという状況でしたが、現在、その比率は 20％そこそこで、80％は普通科に行きます。そうなると、当然そこには生徒の学力やモチベーションという点での多様化という問題が進んできていて、普通科も多様化せざるを得ない。それに加えて学校週五日制という問題もあって、どんどん学校の裁量を拡大して、それぞれ生徒のニーズ、あるいは地域のニーズに応えるようにというトーンで政策が進められてきたわけです。

そういう状況なので、勢い生徒の学力、その前提となる学校側の働きかけも、学校によって大きく違ってきます。そして今申し上げたように、学習指導要領でも教科を必ずしもすべて取る必要はないとされたことで、かなり選択の余地も生まれました。その結果、高校で未履修の科目の状況を見ると、とりわけ数 III・数 C や物理で相当開きがあります。所属の学部によっての開きとも言えますが、履修状況には大きな差があり、履修している者と履修していない者で、学力に相当の開きが生まれてしまっている状況です。

また、生徒の勉強時間も多様になっています。偏差値 55 以上の成績上位層ではそれほど勉強時間数が減っているわけではないのですが、偏差値 50～55 ぐらいの 2 番手の層の勉強時間が、年を追うごとにかなり減ってしまっています。このような状況をとらえて、二極化という言い方もされています。

1-3. 高校生の学習行動や進路意識の多様化

また、学習行動と進路意識にも生徒の間でかなりの多様性が見られる状況です。例えば、毎日予習・復習をするか、あるいは宿題があれば必ずするかという問い掛けに対して、成績上位層と成績下位層との間ではかなりの開きが出ています。ただ、成績上位層でも自主的な学習行動、特に宿題がなくても授業の前後、予習・復習はちゃんとするという層は、必ずしも多いわけではありません。当然それが進路意識にもいろいろな形で反映してきます。

教員に対して進路指導を行う上で困難を感じているかどうかというアンケートを取ってみると、大学・短大進学率が 70%を超える比較的進学志向の強い高校においても、「非常に難しい」「やや難しい」と感じている教員が全体の 9 割います。そして、その難しさの要因として、8 割の高校教員が高校生自身の意識が昔とは違ってきていることを挙げているという状況があります。

1-4. 生徒の主体性形成のため高校の取り組み

それでは、そのような生徒の状況に対して高校の先生たちはどのように対処しているかということです。もちろんこれは高校によって千差万別ですが、一つ言えることは、いわゆる各県のトップ校、これは東京都でも同じですが、公立で見るとトップ校の場合は旧制中学校の流れを結構引いていて、その文化も教員に結構共有されていたりして、ぎりぎりと生徒をしごくということについて消極的な先生が結構いるわけです。

やや極端に言えば、そのような高校だと、勉強をする、しないは生徒の自由だ。できない生徒はできなくて構わない。そういう生徒は勝手に落ちこぼれていくだろうというぐらいの感じで、鷹揚に構えるというか、生徒の自主性に任せるというか、放任というのか、それが多く見られるパターンでした。先生方も多分どこかでそのような教育を受けてこられたのではないかと思いますが、現在はそういうやり方では、いわゆるトップ校といえどもなかなかやっていけないという状況が生まれています。

私もトップ校といわれている高校の校長や進路指導担当の先生などに、お目に掛かってお話を聞く機会が何度かありましたが、大きな変化ということを幾度も強調されていました。今は伝統校でも生徒に対して積極的な働きかけをせざるを得ない。そうしないと生徒は本当に何もしなくなってしまって成績も悪くなる。もっと言えば、進学実績が悪くなる。進学実績が悪くなれば、悪循環でいい生徒が集まらなくなってしまう。従って、もうそれは放置することはできないという状況で、伝統校においても相当丁寧な指導を行うようになっています。つまり、主体的な学習力を獲得させるために手を掛ける。生徒が主体的に行動することを待つのではなくて、主体性を育てるために教員の側が積極的に働きかけようという状況になってきているということです。

そういう働きかけもあって、手応えを感じている先生も結構います。そういう先生たちが、生徒が何とか自立したなと感じるのはどんなときか聞いてみると、次のようなものが挙げられています。①質問の水準が向上し、本当に必要な質問がきちんとできるようになる。②不本意な結果になったとしても、それを責任転嫁するのではなく、ちゃんと自分を見つめる態度が取れる。③表面的にはしっかりしているけれどもどうかなと思われるような自己主張ではなく、学習方法で自分なりの工夫がちゃんとできる。④そのようにして工夫した勉強方法で自分なりに実践する。⑤その結果として、ちゃんと自分なりの考えも持てるし、資料等々の読み方も深くなる。このようなことも、一つは高校現場で起きているということです。

1-5. 単位制度の基本的な考え方

さて、それでは次に大学の単位制度という問題を取り上げます。そもそも単位制度とはどのようになっているか、先生方には釈迦に説法の感もありますが、今一度確認しておきたいと思います。

大学設置基準の第 21 条は、「各授業科目の単位数は、大学において定めるものとする」と規定しています。つまり、別の条文で大学は 4 年間在学して 124 単位と規定されているのですが、その具体的な構成に関しては各大学において定める。ただし、それぞれの単位の時間数については規定していて、1 単位の授業科目を 45 時間の学修を必要とする内容をもって構成することを標準とし、講義および演習、実験、実習および実技等の授業時間数も決めています。

例えば 2 単位の授業の場合、学習時間の合計は 1 単位 45 時間ですから 2 倍の 90 時間です。授業外の学習時間は、総時間数から総授業時数を引いて 60 時間になります。15 週ありますから、60 時間を 15 週で割って 4 時間。つまり、2 単位の科目を履修して単位を取るためには、1 科目当たり毎週、授業外の学習時間を 4 時間取らなければいけないということになります。これが 1 コマで、週当たり 4 時間ですから、10 コマ取ればそれだけで 40 時間になってしまうわけです。

このようにいろいろと大学設置基準で規定されていることには、背景がもちろんありまして、その一つが 1998 年にその当時の大学審議会が出した答申です。その答申の中で、大学の教育の現状につい

て、かなり厳しいトーンで指摘がなされたのです。簡単に言うと、大学の単位の与え方は非常に甘い。本来の規定の 15 回、15 週をきちんと担保していない。それにもかかわらず単位は出している。こういう在り方はまずい、もう少しきちんと授業時間を確保すべきという指摘がなされ、学業成績の厳格化、成績評価の厳格化もうたわれました。

特に授業外の時間をきちんと取らせるようにということだったのですが、学生に自由に単位を取らせておくと、後で単位が取れなくなることを心配する余り、どうしても単位を早取りする傾向になってしまうなど、いろいろな心配があります。1 週間に 10 コマ以上取っている学生もごく当たり前に見られるようになっています。そうなってくると理論上、当然授業外の学習時間が確保できないということになってくるので、それを担保するために各大学はいろいろな対応を取るようになりました。

その一つが単位の上限設定で、キャップ制とも言います。つまり、学生が 1 セメスターで取れる単位数の上限を決めるということを行う大学が増えてきたわけです。一番新しい平成 20 年度の文部科学省調査のデータでは全体の 68%、約 7 割の大学が上限設定をするという状況になっています。

2. 大学生の学習行動・教育観の現状

さて、次に大学生の学習行動あるいは教育観の現状を、各種の調査結果に基づいて見ていきたいと思います。一つは、昨年度まで東大教育学研究科におられた金子元久先生が指導しておられた「全国大学生調査」の結果、それからベネッセの教育研究開発センターが 2008 年に行った「大学生の学習・生活に関する意識・実態調査」、これは同志社大学の山田先生が中心となって進めてこられた調査です。主にこの二つを使いながら、どういう状況になっているかを見ていきたいと思います。

2-1. 授業への参加度は低く、教員への依存度は高い

あらかじめ結論を言うと、学生の主体的な学習、特に授業外の学習が非常に弱いということが数値とともに出てきます。例えば、「授業の中でグループワークやディスカッションに積極的に参加しているか」という問いに対して「あてはまる」「ある程度あてはまる」と肯定的に答える割合は、40%強にとどまっています。それから、「先生に相談したり、勉強の仕方を相談しているか」という問いに対して肯定的に回答している割合は、何と 26.9%という状況です。何か困ったら教員に相談するかというと、相談はしない。

ところが、教員への依存度は結構高いのです。例えば、「授業の意義や必要性について教えてもらいたいか」という問いに対しては、「教えてほしい」と答える学生が全体の 61.5%、「自分で見いだしたい」と回答する学生は、その裏返しで 38%程度にとどまっています。それから、「授業で必要なことをすべて扱ってほしいか」という問いに対しては、「そう思う」「ややそう思う」という肯定的な答えの割合が 74%で、反対の「授業はきっかけにしかすぎない、あとは自分で学んでいきたい」という回

答は35%程度にとどまっているという状況で、教員の教えとは関係なく自分でいろいろやっていくという行動が何となく弱いという結果が出てきます。

それから、ベネッセの統計で、授業の好みに関するデータがあります。「応用的・発展的な内容は少ないが、基礎・基本が中心の授業」と、それとは反対に「応用・発展的内容が中心の授業」のどちらがよいかというと、よいのは前者、つまり応用的・発展的な内容は少なくてもいいと考える学生が70%以上です。それから、「教員が知識・技術を教える講義形式の授業」と「学生が自分で調べて発表する演習形式の授業」とではどちらが多い方がいいかというと、こちらも82%の学生が、とにかく教員が教えてくれる授業の方がよいというとらえ方をしています。全体に前向きではないことがよくわかると思います。

2-2. 学習時間に見られる傾向

予習・復習をするということに関して言うと、必要な予習・復習をした上で授業に臨んでいると肯定的に答える学生は、全体の3割以下というデータも出てきます。これはもちろん専攻分野によって多少違いますが、平均すると今言ったような状況です。

授業・実験の課題、準備・復習のための時間を見ると、週0時間、ほとんどしていないという学生が結構いて、してもせいぜい週1〜5時間程度と答える学生が多い。また、学期中における授業と無関係の学習時間の週当たりの時間数を見ても、非常に少ないことがデータから見て取れます。授業外の学習については、残念ながら多くの学生が消極的だということです。

さらに驚いたことに、この1カ月にどのぐらい本を読んだかという問いに対して、実に3割ぐらいの学生は1冊も読んでいないと答えていて、1冊と答えた学生と合わせると半数以上に達してしまうという状況です。

2-3. 授業への取り組み方

非常に情けない状況ではあるのですが、一方で、授業への取り組みは結構まじめなのです。例えば「授業に必要な教科書、資料、ノート等を毎回持参する」と 90%以上が答えていますし、「授業で出された宿題や課題はきちんとやる」と 90%近くが答えています。「授業中は黒板に書かれていない内容もノートにとる」学生は70%ぐらいいるのです。これにも少し驚きます。授業にはなかなかまじめに取り組んでいることはわかるのですが、「授業でわからなかったことは先生に質問する」「授業の復習をする」「授業の予習をする」というところになると途端に少なくなるということで、この点でも先ほどのデータにみられるように、自発的な学習行動が弱い傾向を裏付ける結果になっています。

1年、2年、3年、4年と学年が進むにつれて予習・復習をする割合がどう変わっていくかというと、予習・復習のいずれも1年生のころはそこそこやっていたものが、学年が上がるごとにどんどんその

割合が下がっていきます。それでは学生たちは一体何に時間を割いているのでしょうか。具体的に見ていくと、予習・復習あるいは大学の授業以外の自主的な勉強を足してみても、テレビ・DVD の視聴の時間には足りません。圧倒的にテレビ・DVD を視聴している時間が多く、趣味の時間がさらに多い。そちらの方に時間を使っていて、授業外で自発的に勉強しようという姿勢ができていない状況だということがわかります。

授業外学習時間を世界の主要国と比較してみると、その差は歴然としています。中教審の 2008 年の答申の資料編に載せてあるデータで見ると、トップはノルウェー、2 番目がイタリア、3 番目がオーストリアです。世界の各国と比べて日本の学生の授業外学習時間が少ないことは一目瞭然です。

2-4. 大学の自己評価と学生評価の格差

このように、非常に消極的というか、自分から働きかけて学習するという行動が弱いことがいろいろな数字から見て取れるわけですが、このような状況に対して大学側が何もしていないということではありません。先生方も日々学生に接していて危機感を持っておられて、さまざまな取り組みをされていると思うのですが、ちょっと残念だなと思うのは、学生がそういう大学側の働きかけについて必ずしも理解しているわけではないということです。

これがその実態を示す一つの資料なのですが、大学側が自分でやっているかどうかという大学の自己評価の割合と、学生側が自分がそういう指導を受けたかどうかという学生の評価との間には、意識の差が生じています。例えば、「学習目的がきちんと示されているかどうか」。大学側は約 40%が示していると答えているのですが、学生側は必ずしもそのようには評価していません。それから「少人数の授業が多いか」。これもどの大学も今は非常に予算的に苦しい中、頑張ってやっていると思いますが、そのようなことはあまりやっていないと見る学生が多い。手を掛けてもなかなか学生は正当には評価してくれないという状況があるわけです。

3. 主体的な学習を促す試み

学生の学習意欲がなかなか高まってこないことの結果として、授業外の取り組みが非常に弱いという状況に関して、一体どのように取り組めばよいのかという話で、主に初年次教育と先輩学生が自分と同輩あるいは後輩の学生に対してサポートするピア・サポート、それから、これは手前みそになりますが名古屋大学で開発した学生向けの学習・生活ガイドを見ていきたいと思います。

3-1. 初年次教育

まず初年次教育ですが、これは簡単に言えば学士課程の 4 年間をのっぺりと過ごすのでなく、初年次、高校と大学との接続期である最初の年に重点的に学生に指導していくという考え方で、「高校（と

他大学）からの円滑な移行を図り、学習および人格的な成長に向けて大学での学問的・社会的な経験を“成功”させるべく、主に大学新入生を対象に総合的に作られた教育プログラム」と定義されています。

高校から大学に進学すると、かなり状況が変わります。そのことに戸惑わないように、大学に適応してその中でちゃんとついていけるように、そして自分で学習できるようにということをサポートしていく取り組みと言うことができます。

初年次教育は、大学生活への適応を促す、大学で必要な学習技術（読み、書き、批判的思考力、調査の方法、タイム・マネジメント)、あるいは自己分析やライフプラン・キャリアプランづくりという内容で行われます。

事実、初年次教育を行っている大学は結構あって、大阪市大の渡邊先生が行われた初年次学生への指導内容を問うたデータを見ると、スタディスキル・アカデミックスキルについてきちんとした指導をするというところが 70%を超えています。つまり、大学できちんと学習をしていくために、ごく基本的なスキルは最初に教えようという姿勢が多くの大学で見られるわけです。

その状況をまた別のデータで見てみようということで、授業への取り組み状況を学生に聞いています。「授業中は黒板に書かれていない内容もノートにとる」「授業でわからなかったことは、自分で調べる」「資格や免許の取得を目指して勉強する」等々の問いに「あてはまる」と答えた学生の割合は、先ほど申し上げた内容と少し違って、自分で調べるというのは結構上の方にありますが、予習・復習をしている学生はやはり少ない。しかし、1 年生に限って言えば、全体よりは 5 ポイント以上、予習・復習に取り組んでいるという結果が出ています。初年次教育のそれなりの成果が、ここに出ていると思います。

しかし、弱い部分も多々あります。例えば「プレゼンテーションの機会を取り入れた授業」「実験や調査の機会を取り入れた授業」「教室外で体験的な活動や実習を行う授業」を体験しているかどうかとなると、1 年生も含めてかなり低い。つまり、体験的な学習あるいは実験、特に文系で言えば調査のような活動を取り入れた授業には、1 年生では必ずしも十分に取り組まれているわけではないということです。このような授業は、要は授業のその場で一発勝負というわけではなく、当然ながら授業外でいろいろ活動をして、それを授業でプレゼンするという形になります。従って、必然的に授業外の活動を促す形になるのですが、そのような点が 1 年生はまだまだ弱いという結果も出ています。

やはり大学の 4 年間できちんと学んでいく上では、このようなことを初年次にきちんとやっていくことが必要なのであって、まだまだそういう点では課題はあるということがわかると思います。

3-2. 授業時間外の学習を促すための条件

学生の主体的な学習行動を促していくためには、初年次のみならず 4 年間かけて、一方的な講義だ

けでなく双方向型の授業をきちんと行っていくことが大事です。その中にあっては、例えばディスカッションやディベートを採用したり、予習・復習を設定する、場合によっては文章力や表現力を鍛えることも必要になってきます。それでは授業時間外の学習を促すためには、一体どういう条件が必要なのでしょうか？

まず一つは、授業外学習の内容についてシラバスできちんと具体的に指示することが求められます。全国の大学のシラバスを見ると、最近はこの点が意識されるようになっていることがわかります。名古屋大学も含めて、授業の中で何をするかということはきちんと書いてあるのですが、その前後に何をするか、何をしてこないと、この授業での学習効果が上がらないという指示なり表現が明確でない場合があります。

2 番目には、授業外学習を促すために、コースパケット（資料集）をそろえることも大事です。非常に厚い教科書を用意すれば済むことかもしれませんが、授業の中だけで話をするのではなく、予習・復習用の資料もセットにして学生に渡していくという方法も一つあるのではないかということです。

この点は、アメリカやオーストラリアなどと比べると、日本の大学は弱いです。著作権の問題がなかなかクリアしづらいので作りにくいのですが、アメリカやオーストラリアの大学では、学期初めのころに大学の生協の本屋に行くと、それぞれの授業ごとにかなり分厚い資料集、テキスト類が販売されています。あのようなものがちゃんとあれば比較的スムーズに授業外の学習を指示できると思うのですが、日本はこういう点ではやはりなかなか難しいということがあります。

それから、そのようなものが用意できないまでも、少なくとも参考文献は提示していく。それぞれのテーマに応じて、こういうテーマであればこういう文献がある、それはきちんと読むようにという形で課題を出すということも当然必要だと思います。そして、小テストなどを行って学習内容の点検を行っていくことが一つの方法として考えられるかと思います。

3-3. 名古屋大学の取り組み

3-3-1. 学生向け学習・生活ガイド

ほかにもいろいろなやり方はあろうかと思います。どのような方法がいいのか、私ども名古屋大学の高等教育研究センターでもあれこれ考えてきました。その中でこれまでにいろいろなものを作ってきたのですが、その一つに学生向けの学習・生活ガイド『ティップス先生からの 7 つの提案』という冊子があります。

たかだか十数ページの小さな冊子なのですが、優れた授業を実践するために何が必要なのか、何をしなければいけないかを学生編、教員編、IT 活用授業編、大学編、教務学生担当職員編に分けて簡潔に示したもので、名古屋大学の高等教育研究センターのウェブにもすべて載せてあります。グーグルで調べていただくとすぐに出てきますので、見ていただければ幸いです。

例えば「教員編」を見ると、優れた授業を行っていく上では、「学生と接する機会を増やす」「学生間で協力して学習させる」「学生を主体的に学習させる」等々、7 点の大きな行動目標が出ています。何だそんなことかとお感じになるかもしれませんが、アメリカの高等教育学会の有志がかなりインテンシブな調査研究をした結果を七つぐらいにまとめて成果発表し、合わせてその冊子も出しています。そのコンセプトをお借りして作った名古屋大学版なのです。

7 点それぞれについて、さらに各項目ごとに具体的に何をするのかをまた 7 つ考えてみました。例えば「学生と接する機会を増やす」ための具体的な行動として、「クラスの学生に会ったら声をかける」「学生にオフィスアワーを積極的に利用するようすすめる」という具合に、大項目七つにそれぞれに小項目が七つ、7×7 で 49 のヒントを作ってみたわけです。こんなものも少し参考にしていただくと、何かのお役に立てるかと思います。

その中から代表的なものとして、「授業時間外の学習を促進するティップス（ヒント）」を引っ張ってみました。一つは、「学習を上手に促す課題を与えよう」ということで、やみくもに学習課題を与えればいいというのではなく、そのあたりを十分考えながら、いきなり重い課題を出すのではなく、まずは軽く、比較的スムーズに達成できるような課題から与えていきましょうということから始まって、その他いろいろなことを書きました。

課題についても、無難なものから頑張って取り組まなければいけないようなもの、それから中には意欲的な学生もいますので、そういう学生には発展的内容の文献や課題を用意する。授業内容の延長上にある最先端の研究を紹介するのもいいのではないかと紹介しています。

学生が個人で学習することにはどうしても限界がありますし、さぼりたくなることもあります。そのようなときには学生同士で共同してやろうではないかと呼びかけています。また、それを教員の働きかけで促していこうということも書いています。

「ティップス」というのは、もともとはヒントやノウハウというぐらいの意味合いなのですが、もちろんこれをすればすべて授業実績が改善されますということではないのです。これはあくまで一つのヒントで、個々の先生方が持っている自分なりの工夫を集めたものです。また、これはあくまで名古屋大学の学生用に作ったものですが、コンセプト自体はどの大学でもお使いいただけるのではないかと思います。七つの大項目が納得できるものであれば、自分の大学の教員あるいは学生の状況を踏まえながら、七つの大項目それぞれについて具体的に何ができるかを話し合われて、それを実践してみることが、かなり有効な方法としてあるのではないかと思います。

もう一つ、「大人数の授業で課題を効果的にフィードバックするためのティップス」についてご紹介します。教員は非常に多忙です。その中で授業をしなければならない、教育改善にも努めなければいけないということで、当然、授業にすべての精力を注ぐことができません。そうであればやはり能率的に、効率的に授業を実践していきましょうという呼びかけでもあります。しなくてもいい苦労はな

るべくしないようにという趣旨で考えています。

例えば、多人数の授業で課題を与えることは非常に大変なことなのですが、それが本当に学生に必要だと考えるならば、やらざるを得ません。しかし、それはあまりに大変なのでやりたくない、自分にはできないと、つい思いがちです。そのようなときに、ちょっとした工夫をすれば案外楽にできますよというヒント、ノウハウを考えてみました。多人数の授業でも、ちょっとした工夫で課題を出すことはできます。ご参考いただければ大変光栄です。

3-3-2. レポート書き方講座

名古屋大学高等教育研究センターで大学生の学習意識、学生たちが学習活動で困ったことを調べたところ、レポートの書き方や授業のノートの取り方などが挙がってきました。要は、授業だけでは勝負できない、授業だけでは学生に授業外の学習、自発的な学習を促すことが難しいため、いろいろなことをしていかざるを得ないということなのです。その対策の一つが「レポート書き方講座」です。

学生へのアンケートでも真っ先に出てくるのがレポートの書き方がわからないということです。私も昔からよく学生にレポートを書かせていました。ほとんど何のインストラクションもなしに、とにかくこの授業でこういうテーマについて書きなさい、分量はこうだという感じで、ほとんど言いっぱなし、出しっぱなしです。授業の最後ということもあって何の指導もしないという困った教育指導を行ってきました。

果たせるかな、学生から提出されるレポートは、非常に問題が多いものになります。言わずと知れたコピペも横行してきます。しかし、それはある意味では仕方がない面もあります。それはどうしてかと言えば、教員がレポートとはそもそもどういうものなのか、どのように書くのかを教えないで、大学生になったのだから書けるだろうという前提で、ただこれについて書きなさいと指示しているだけだからです。

私も本当に未熟で、そのようなことばかりしていましたが、あるとき学生はわかっていないのだということに気が付きました。そして、これは授業外でレポートの書き方についての指導をするしかないのではないかと考えて、今、私どもセンターでは学生を対象にレポートの書き方の講座を開いています。初年次の少人数セミナーとセットにして、セミナーの中でさせる調査の延長線上で論文を書いてみようではないかということでやっています。また、それをちょっと発展させる形で、学生の論文コンテストも実施しています。

あと、これは私どもは不十分でほとんどやっていませんが、アドバイザー制度・チューター制度も、学生の授業外の学習を促すためには必要になってくると考えています。

3-5. ピア・サポート

いま一つは、教員だけではどうしても限界がありますし、職員に協力を求めるにしてもやはり限界があります。とすれば、そこはやはり学生同士で頑張ってもらおうということで、ピア・サポートというものも一つの在り方かと考えています。

3-6. スタディティップス

そしてもう一つ、私ども名古屋大学では、「スタディティップス」といって、教員のためのティーチングティップスだけでなく、学生、特に新入生に向けて、一体大学では何が求められるのかということをわかりやすく説明したティップス、学習活動の進め方のノウハウ集も作っています。

3-7. ラーニング・コモンズの構築

最後に名古屋大学の取り組みでもう一つご紹介したいのは、図書館の活動です。大学の中にはいろいろな方がいます。教員だけが頑張るのではなく、事務職員だけが頑張るのでもない、もちろん執行部だけが頑張るわけでなく、みんなで協力し合って学生の学びをサポートしていくことが必要なのだと思います。そのような中で一つ注目されるのが図書館です。

今は図書館の職員の人たちも結構忙しいと思うのですが、名古屋大学の図書館ではいろいろな講座を開設してくれています。アカデミック・プレゼンテーションの入門講座、あるいは学生や教職員が希望して具体的なテーマを示してくれれば、こちらの方から出向いて講習をやりますというオーダーメイド講習会も開いてもらえます。図書館の施設設備も大きく変えて、ラーニング・コモンズと言っていますが、学習空間に変えていこうという発想です。

名古屋大学の図書館では、入り口を大胆に変えてスタバの喫茶店を入れたり、通常の閲覧室でなく学生が共同で学習し、議論できる空間も作っています。また、BS のニュースを語学の勉強用に視聴できるスペースも作っています。極めつけは院生をヘルプデスクに置き、レポートの書き方や学習相談に応じるという体制も整えています。つまり、いろいろな人たちがいろいろな形で学生の学習にかかわるような体制になっているわけです。

4. まとめ

それでは、まとめに移りたいと思います。学生の学習活動を支援するためにということです。今に始まったことではないと思うのですが、能力・知識の獲得は、授業時間だけで行うのはやはり難しく、授業と授業外学習との有機的な連携が不可欠です。

授業と授業外学習との有機的な連関については幾つかの研究もありますが、それができれば知識・能力の習得だけでなく、大学教育そのものに対する満足度もやはり変わってくるといわれています。

授業は熱心に出るけれども授業外の学習をしないという学生もいますが、そういう学生は授業にも出てこない、授業外学習もしない、一番学習活動の鈍い層と、能力の形成という点でも、大学教育への満足度という点でも変わらないという結果も出ています。授業外学習への学生の取り組みは、現状では極めて不十分です。

先ほども申しましたように、大学教育を改善するためには、教員だけでなく、大学組織、執行部、事務職員がそれぞれの役割・責任を果たすことが重要です。しかし、それだけでは思うようにはいきません。中心は学生ですから、何より学生自身にも教育改善・授業改善に取り組んでもらう、加わってもらうという視点もとても大事なのではないかと思います。その一つがピア・サポートです。実際に行っていく上ではまた留意点もあろうかと思いますけれども、このようなことに学生自身も巻き込んでいくことが重要なのではないかと考えます。

それを前提にしての話ですが、主体的な学習行動を習得させるためには、教員の積極的な働きかけが必要です。ちょっと手を伸ばせば届く、自分でもできるなと思うような課題を与えるなど、ちょっとした工夫で学生に授業外学習を促すことは可能だと思います。そのような工夫をしてみる。個々の先生方はノウハウを蓄積しておられると思うのです。それをご自身だけで完結させるのではなく、ぜひお隣の先生方、あるいは学科の先生方、学部の先生方と共有して広げていかれると、学生の学習の質向上に貢献していくことになるだろうと考えます。

学生の質をめぐる問題については端折りますが、いずれにしても学生の学びの質を高めて学生の授業外活動を促していく。そのことによって学生自身の成長を促進していくということが、今われわれに強く求められているといえるのではないかと考えます。

ご清聴いただき、どうもありがとうございました。